燃ゆる感動 かごしま国体 特別国民体育大会ボウリング競技 10月8～12日 サンライトゾーン

神奈川県が4度目の男女総合優勝

女子総合は大阪府が圧勝で19大会ぶり

▲優勝種目こそなかったが、3大会ぶりの総合優勝の神奈川。少年の部は先に競技が終了して表彰には参加できなかったが、女子個人戦で濱﨑りりあ選手が2位、男子団体で川合・大石選手組が6位に入り、しっかり総合優勝に貢献した

◀4人チーム戦優勝の大阪。成年女子監督でもある中野（前列左）の個人戦、石本（後列右）・庭月野（前列右）選手組の2人チーム戦と合わせ3種目制覇で文句なしの女子総合優勝にも輝いた

鹿児島国体ボウリング競技は、10月8日から12日まで、鹿児島市内のサンライトゾーンで行われたが、来年からは『国民スポーツ大会（略称・国スポ）』に名称が変更されるため、『国民体育大会』という名称で行われる最後の大会となった。また2021年からはプロボウラーにも門戸が開放されたが、それを実感させる大会ともなった。男女総合は、選手層の厚さを誇る神奈川が3大会ぶり4度目の優勝、また女子総合は、大阪が19大会ぶり3度目の優勝を飾った。

▲少年男子個人戦優勝の横内（左）と、女子個人戦優勝の森は、ともに今年からプロとしても活動

少年の部

個人戦は男女ともプロの横内、森が優勝

個人戦男子は、今年のプロテストに合格した横内結樹（大阪）が、予選を4位で通過すると、決勝は他の選手が苦戦するなか、673を打って、トータル2020で優勝した。また女子も、今年プロデビューの森恵美（奈良）が、予選を1位で通過すると、決勝は伸び悩んだが、トータル1875で優勝を飾った。

団体戦男子は、上位5チームが大会新記録というハイレベルの戦いだったが、なかでも予選を1位通過の沖縄（津波古・座波）が、決勝も1328を打って差を広げ、トータル2676で快勝した。女子は、予選を三重（中村・種瀬）が前年優勝の群馬を1ピン抑える1144の1位でクリアすると、後半も1160を打って群馬との差を70ピンまで広げて優勝した。

成年の部

女子は大阪が3種目を完全制覇

個人戦男子は、予選を1455で1位の菅原奏選手（岩手）と1420で2位の今年プロデビューの宮澤拓哉（群馬）が決勝でも優勝争いを繰り広げたが、菅原選手が、最終G267を打った宮澤の追い上げを24ピン退ける2103で優勝した。女子は、今年プロ入りの中野麻希（大阪）が予選を1236で1位通過、石本美来選手（広島）が1200の2位で続いていた。決勝1G目245を打った石本選手が172の中野を逆転したが、2G目は中野が1フレから9連発の276を叩いて再逆転、そのまま64ピン差をつける1878で初優勝を飾った。

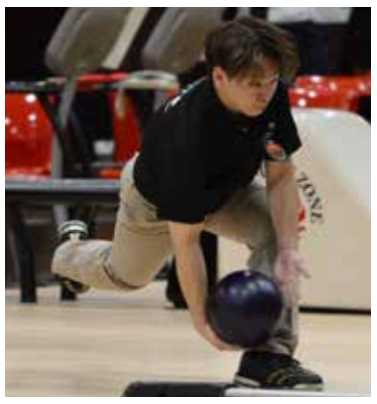
2人チーム戦男子は大激戦だったが、予選1位の滋賀B（伊吹・新畑）が、予選2位の神奈川A（畑・鶴見）を14ピン退ける2626で優勝した。女子は、予選5位通過の大阪B（石本裕・庭月野）が決勝2G目に413、最終Gは423を打って、トータル2322で逆転優勝を飾った。

4人チーム戦男子は、予選を2766で2位に200ピン近い差をつけた長崎（福満・原口・山本・山下）が、決勝はスコアメイクに苦しみながらも、トータル5122で初優勝を飾った。女子は、予選を2305の広島（石本・折口・門田・小川）が1位、10ピン差で大阪（石本・石本・中野・庭月野）が続いていた。決勝2Gを終わって広島が43ピン差で首位を守っていたが、最終G大阪が838を打って、トータル4628で鮮やかな逆転優勝を飾った。

☆

天皇杯得点を競う男女総合は、優勝こそなかったものの、各種目で入賞ポイントを稼いだ神奈川が4度目の総合優勝、昨年優勝の群馬が2位だった。

皇后杯得点を競う女子総合は、成年の部の個人戦、2人チーム戦、4人チーム戦の3種目を完全制覇した大阪が圧勝で、3度目の優勝を飾った。



▲「（優勝争いの）宮澤選手のスコアは気にせずに、自分のラインを見つけることに集中した」と成年男子個人戦優勝の菅原選手

◀「決勝2ゲーム目は、ラッキーもあって9発続いてくれた」と、その276でぐっと優勝を手繰り寄せた中野

▲念願の4人チーム戦初優勝の長崎。左から原口、福満、橋本監督、山本、山下選手

▲（左）優勝が決まって歓喜の笑顔の山下選手「苦しんだ分だけ本当にうれしい」

▲少年男子団体戦は、台風の影響で出場がかなわなかった高校選手権のうっ憤を晴らすように、沖縄（津波古・座波）が快勝

▲少年女子団体戦は、前年優勝の群馬との競り合いを制した三重（中村・種瀬）が優勝

▲男子2人チーム戦は滋賀（伊吹・新畑）が優勝。「2年後の滋賀国体まではプロとの二刀流で」と伊吹（左）